SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

望月勝海教授を悼む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-09-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鮫島, 輝彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006111

望月勝海教授を悼む

鮫　島　輝　彦*

当教室主任望月勝海教授は昭和38年11月23日 胃癌のため急逝された。享年58才 であった。9月4日に胃切除手術を受けられてから僅かに2カ月半であった。7月には災害研究のため飯田地方に出掛けられたり，8月初めには高校地学教員の講習会の講師を勤められたりして活躍されて居られたし，病臥されたのは手術の前後20日間と，お亡なりになる前の20日間丈であった。

望月教授の地学に対する貢献は地体構造論を主軸とする構造地質学の分野と旧制高等学校，新制大学における35年半の永きにわたる教育業績と多数の教科書の執筆の他，地学史，地理学の分野にも一石を投ぜられ，又晩年には災害地質に取組まれて居られた。

御著書15巻，学術論文約50編を数える。

処女作は大正14年（1925）水戸高等学校生徒時代に地球第3巻に投稿された「南部阿武隈山脈の地形考察」であって，この一篇の中に既に地体構造，地形学，地質災害など生涯の主題とされた各分野に対する関心が包含されているのを発見する。漱石張りの名文で始まるこの論文は，教授の著作の総てに共通する力強く朗々とした文章の序曲と見做されるので，ここにその冒頭の一部を引用しよう。

「美しい北常陸の平原—林と畠に彩られ所々に池沼をたたへ緩い勾配の間には水田が開けている—を越して，水戸附近の丘から北方を望むと或時は模糊として，或時は劃然として阿武隈山脈の南脚が見える。京都から東山，北山を見るやうな親しさ暖さでなく，北方特有な色の空に覆はれ永久に眠る国王の如く深い魅力を持ちながら懐疑的な又お伽噺的な気分を起す。

東の方蜒々と続く丘陵のやうな山，その中に煙をあげてゐる日立の煙突と真弓山の大理石採取場の白さとが目につく。これだけの間隔は鉱山の煙も雑沓喧騒を想起せしめずして，西行法師の行方も知らぬわが思ひかなと

* 文理学部助教授

歌った富士山の煙を偲ばせるのである。眼を徐々に西方に転ずれば高鈴山(624米)大きく聳え，それより平凡に或は雄大に起伏を続けてゐる。然しその西端に来た時，一度躍踊し運慶に刻まれし仁王の筋肉の如く盛り上り，更に一ぺん断絶し，低き小起伏として月居山・長福山の二つが大絶壁の下に同形をなして見えてゐるのは注意しなくてはならない。快晴の日は八溝山(1010)の円頂と端然たる那須嶽(1912)とが仰がれる。何しろこの眺望は決して明るい快いものではない。断乎として出入を拒み沈黙を欲してゐる姿である。」

望月教授の名著「地質学入門」は昭和6年(1931)の初版で，昭和3年東京帝国大学理学部地質学科を御卒業後直に金沢の第4高等学校に赴任され，僅か3年後に一週17時間の授業の重荷を負いながら執筆されたものである。初版の序文の一部を引用しよう。

「類書も少からぬ中に浅学の著者がをこがましく雑魚(ざこ)の魚(とと)まじりをするのは各書がその著者によって特徴を異にする故いくら有ってもよいと云う信念からである。又北陸の冬の荒天に鎖されて，下宿の窓をたたく雪や霰に対する憂鬱を慰めん事も動機の一であった。若し本書中に「地質学入門」に適はしからぬ独断的なもの有りとせば，その憂鬱の爆発として寛恕を乞ふ次第である。昭和六年六月三日　尾山城下にて」

昭和18年に上梓された「大東亜地体構造論」は，昭和8年頃から関心を高められ，主題が昭和13年(1938)に Jap. Jour. Geol. Geogr. に二つの英文論文 "A Study of Japanese Arcuate mountains" と "On Some Features of the Meeting of Arcs in the Japanese Archipelago" として提出された独創的な地体構造論の集大成で，望月教授の学問に対する直接の最大の貢献と見做されるものである。惜しい事に2千部印刷された筈であるが，その大部分は戦災によって灰燼に帰したらしく，現在では古書店でも稀刊本に属するものとなっている。

戦後地学教育が新しい息吹きを営み始める時，かねて地学史に興味を抱いて居られた教授は，日本の地学界の将来の基礎を固める意味で昭和23年(1948)に「日本地学史」をあらわされた。国土は荒廃し又食料事情も最悪であった時期に，御病気の奥様と6人のお子様を抱えられて，なおこのような地道な優れた著書を執筆されたのは力強く安定した精神力の賜に他ならない。本書もまた

初版のみで絶版となっているが，我国の地学史書としては現在でも唯一のものである。

昭和31年(1956)に旧版を完全に改訂された「新版地質学入門」があらわされた。「地質学入門がでたのは25年前。当時は独身の青年，今は頭髪に白きをまじえている。世の変りかたは一層すさまじい。この序文を書きながらも，「年たけてまた越ゆべしと思いきや命なりけり佐夜の中山」という西行の歎きを禁じない。旧版は発行部数も万をもって数え，いささか世の中に役立ったことは著者としてよろこばしい。」と序文に述べられている。

望月教授は昭和16年第4高等学校から旧制静岡高等学校に移られ，昭和24年静岡大学発足と共に文理学部教授となられ，昭和26年に5人の職員がそろって地学教室が開設されて以来12年間教室主任を勤められた。この間 文理学部長，学生部長を歴任せられ忙しいお体であったが，著作に研究に寸暇を割いて地学しずはたにも度々投稿して下さった。

しずはた27号(1962年)に 寄せられた「大地形・地質構造の根本問題をめぐる第2稿」は最後の論文となったもので，「大東亜地体構造論」以来20年間のこの分野の進展を採り入れて，以前に取り上げられた諸問題を新しい光の下で再び検討されている。この論文は教授の地体構造論の完成への第2段階の礎石となる筈のものであったと考えられ，文章にも新しい意欲の気魄が充分に窺える。

「どうも書物を読み続ける気力が無くなって困っています。」と死の病床にあっても洩されたように，読書を愛され，一生涯全力を挙げて勉強された望月教授の生き方は私達にとって常に鏡であった。癌も医学の総力を結集しての攻撃の前にやがてはかの結核のように撲滅される日を迎えるであろう。その日をまたずして発病された事は不幸と云うより仕方がない。残された奥様や8人の御子様の御歎きは御察しするに余りあるのは勿論であるが，私達もかけがえのない指導者を失い，日本の地学界も優れた先導者の一人を失ってしまった。

ここに望月教授の足跡の一端を記し追悼の辞にかえたい。

石や雲あいてに心なけれども
よき人つどう地学しずはた　　望月勝海

(地学しずはた第2号に贈られた歌)